

現地通信

フィールド調査に出る前、もっとも時間を割いて準備するのは、医薬品関係の荷物である。調査地では、日頃から体調の管理には最善の注意を払う。可能な範囲で食生活にも気をつかい、睡眠を多くとるように心がける。もっとも安い、掛け捨ての旅行保険にもかならず加入する。できれば使いたくないなと考えながらも、小さなバグ一杯に、薬や包帯を詰め込む。

それでも具合が悪くなることがある。たとえば、精霊にちょっとしたわるさをされることがある。自分に悪意を抱いている誰かによって、体の具合が悪くなるように、精霊を送り込まれることがあるのだ。そういった場合、手持ちの薬が効き目を発揮することは稀である。具合が悪くなった本人が、これは精霊の仕業だ、などとすぐに思い当たるものでもない。フィールドワーカーの多くは、自分の言動に細心の注意を払って、できるだけ謙虚に礼儀正しく過ごそう、透明人間ほど存在感がなくても困るけど……などと考えながら過ごしているつもりなのだ。

私の調査地は、インドネシア・マカッサル海峡にある小さな隆起サンゴ礁の島である。島での私の「父」は、評判の呪術師である。呪術師は副業で、彼の本業は島とマカッサルをむすぶ連絡船の船長であった。私は日本から来た彼のムスメとして、島の人々に受け入れられていた。島の人々は、私にわるさをすれば、呪術師の父がだまっていけないだろう、と考えていた。

私は調査を始める前に、あることを怠った（正確に言えば、そんなこと思いもつかなかった）ため、精霊から罰を受けることになった。父の治療を初めて受けた後、「精霊の仕業だよ。おまえはどうやら、島のご先祖さまに挨拶をしなかったようだね」と父は私に宣告した。呪術師のムスメにあるまじきこと

* Satoko Hamamoto, 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

呪術師と暮らして

濱元聡子*

であろう。

1998年8月18日、真夜中のことであった。突然の腹痛に目が覚めて、とりあえず、手持ちの薬を飲んでみた。横になることができないくらい、激しい痛みである。恐ろしい病気の名前が、つぎつぎと頭の中に浮かんできた。だが、原因に心当たりはあった。たぶん、昼間食べたかき氷であろう。いつもは決して口にしないのに、喉の乾きに堪えかねたのである。昨日はインドネシアの独立記念日で、私は隣組の一員として、余興の綱引き大会に出場したのだった。

脱水症状にならないように、日本から持参した粉末アルカリイオン飲料を水に溶いて飲んでみた。誰かに頼んで、真夜中に船を出してもらうのは申し訳ない。朝になれば、マカッサルへ行く船があるはずなので、それまで我慢することにした。

翌朝、具合はすこしよくなっていた。父に病気の治療を頼んだのは、むしろ少し余裕がでてきたからである。自己診断で、これはたぶん死ぬことはないはず、と見当をつけた。

我が家へは、いろいろな病気や悩みを抱えた人が、父の治療を受けにやって来る。治療中の彼らが絶叫をあげ、エビのように体を折り曲げて暴れ、ホラー映画の少女みたいに首を後ろに回す光景を、何度もみてきた。その人の体内に潜んでいる精霊が、治療をいやがって暴れ狂うのである。そういう経験を、ほんのすこしだけ期待したのかもなかった。

出港前の父に頼む。父はニヤリと笑って、無言で私に長椅子に座るよう促した。私は両足を伸ばして、父と向かい合って座る。父が呪文を唱え、私の左足の親指を軽くつまんだ。と、足指先からの激痛が、電流のごとく体内へ向かって走っていく。正確には、熱いのであった。「タバコの先っぽをおしつけられているみたいだろう？」と父がいう。そのとおりです、と口にすることはできない。私は両手を

振り回し、長椅子に倒れ込んで、もうやめてー、と叫んだ。

とにかく、病状は快復した。薬の効き目がちょうど現れたのかもしれないし、本当に精霊が出ていったのかもしれない。本当に熱かったのだろうか、本当に痛かったのだろうか、あとから少し考えたりもした。しかし、不思議なことは、不思議なこととして、そのまま受け取ろう、と考えることにした。科学的な理由付けや、文化人類学的な解釈をつけようと思えば、いくらでもできるのかもしれない。だが、大事なことは、具合がよくなったということである。病院に行くこともなく、自宅で痛みを治すことができた。このことが、もしかするともっとも重要なことではないか、と考えたりした。島の人にとっても、そうなのではないかとふと思った。

父をたずねて治療にくるのは、島に住んでいる人だけではなかった。マカッサルから船に乗って来る人も、月に3人はいた。男女の比は半々で、かならず家族の誰かが付き添ってきた。そして、ほとんどの場合、父の治療を受けるように病人を促すのも、家族の誰かであった。病院を転々としたが、病気の原因がわからず、父を頼ってくる人も多かった。

ガンにかかった人が来た。潜水病にかかったナマコ漁師もいた。黄疸症状が出て、誰がみても肝臓を患っているような人も運ばれてきた。近代医学によって、名前がつけられている病気以外にも、さまざまな症状の人が運ばれてきた。その中で一番多かったのは、特殊な行動を繰り返す、狐憑きの一種と思われる症状を呈する場合であった。原因がわかっている場合も、わからない場合も、病気のすべては精霊によるものだと、父は考えていた。ひどいデング熱にかかり、私は日本に一時帰国したことがあった。「病院なんぞに行かなくても、おれが治してやったのに」と父は悔しがったという。デング熱もマラリアも、蚊によって媒介される病気である。父によれば、そのような蚊を、ある人物を刺すようにし向けるのも、精霊であるという。

ある日、父のもとに子どもが運ばれてきた。母親は3年前に病死しており、父親がサロン（インドネシアで広く使われる腰巻き布）にくるんだ男の子を抱きかかえて、長椅子に座っていた。子どもの父親は、私の父の船に乗っている船子である。

私が帰宅したとき、すでに治療は始まっていたようである。小学校1年だという子どもはおとなしく父親に抱かれていた。呪文に反応していないということは、精霊が体内にいないということなのだろう。

結果が得られないままに、ひとまず治療が終わった。

雑談が始まった時点で、どうしたのですか、と私はその子の父親に尋ねてみた。数日前に、高床式住居の階段を踏み外して、男の子は下に落ちたのだという。そのときに腰のあたりを強打して、歩けなくなったそう。どんな具合なのかちょっと見たいと思ひ、サロンの裾をまくってもらった。

子どもの両腿の太さが違っていた。左腿は右腿の半分ほどに痩せてしまっている。私は、いつもなら、どんな場合でも、父の患者に対して、病状に係る言葉をかけることはしない。しかし、このときだけは、マカッサルの病院に運んでみてはどうですか、と言わずにはいられなかった。

男の子の父親は困った顔をした。私の父は、なにもわかっていないなあ、というように笑い声をあげた。「この人の家にそんなお金の余裕はないのだよ。この子は一生、不自由な足でも構わないのだ」。

本当は、私は自分の言葉の無責任さに、瞬時に気が付いていた。私は自分の失言を恥ずかしく思った。それなのに、自分がお金を出すから、今からすぐにマカッサルへ行こう、と私は大声を出した。失言を取り繕おうとしたのである。それにやはり、こんな小さな子が、もう歩けなくなるかもしれない、ということがひどく気の毒に思われた。その場に居合わせた全員が、なんとなくきまりが悪い思いをしているのに気付きもしなかった。私はひとりでかっかとしていた。父子が帰ったあとも、しばらく誰とも口をきく気になれなかった。

三日後、子どもが死んだという知らせが届いた。私はひとりで子どもの家に向かい、死者の最後の水浴が始まるまで、亡骸のそばに座っていた。水浴が始まり、子どもの衣類が脱がされ、背中が露わになった。小さな背中的一面が、青黒い色をしている。骨が折れていたのではなく、内臓破裂でもしていたのだろう。突然、私は自分が男の子を殺したような気がしてきた。無理をしてでも、子どもをマ

カッサルへ連れていくべきであったのだ……。

目の前で苦しんでいる人をじっと見ているだけで、何が研究だ。もうなにも観察したくない。日本に帰るぞ、と思ひさえした。

気分を鎮めるため、私はマカッサルで数日間を過ごすことにした。このとき、私は大学への月刊報告を書いている。亡くなった子どものことも手短かに書き、いかに自分が腹を立てているかと記述している。

すぐに返信が来た。そこには、病院に運んだからといって助かったとは限らないのですよ、お金とか近代技術の問題ではないのです、と書かれていた。

私の住む島では、陸地の病院はさほどに信頼されていない。答えは簡単で、精霊を体内から追い払うことのできるの、呪文を知っている呪術師だけだからだ。しかし、だからといって、近代医学がまったく無視されているというわけでもない。どちらを選ぶかは、本人の意志にもよるし、家族の意向や金銭状況にもよる。この選択に対して、他者は善悪の判断をおこなわない。

端からみれば、お金がないから、安上がりの呪術師の治療を受けるというのは、わかりやすい図式である。しかし、実際には、いろいろな意志決定の回路を経て、最終的な選択にたどりつく。自分と他者との関係も、深く考慮される。たとえば、自分の雇い主が高名な呪術師であるのに、親戚の顔を立てるため、まだ経験も浅い甥っ子に治療を頼むこともある。

男の子の死後、私は、病気はかならず治療されるべきものなのか、と考えるようになった。健康は、つねに正しいかどうか、と少し野蛮なことも考えた。近代医学の恩恵を受けることのできない人を、気の毒に思うという発想は、どこから来たのだろうかと考えた。

島には、心身に障害のある人が何人か住んでいた。病院にいるほうが、はるかに治る速度が速いのではないか、と思うような病人やけが人もいた。その誰もが、家族や近所の人からの愛情や手厚い看護を受けて、穏やかに生活していることを、私はよく知っていた。

島の人々は、病院へ行かねばならないということは、もうそれ以外に選択肢がない、それほどに状態が悪いのだと考えていた。つまり、死にゆく場所ということである。一方で、家にいれば、家族や近所の人がいるから、寂しくはない。たとえ死ぬとしても、家族に看取られてのほうがよい。

いろいろな治療の方法がある。いろいろな死に方法がある。調査から帰ってきて、そういうことを考えるようになった。自分が人の生死を左右できたかもしれない、とこれからは考えないだろう。だから、これからも自分のために、何種類もの薬や包帯を調査地に持っていこう。もし薬を分けて欲しいと言われたら、可能な範囲でそうするかもしれない。そして、その後で、呪術師にもみてもらうように勧めることだろう。